

看護のための生活科学教育への取り組み  
-宮崎県立看護大学 普遍科目 文化と看護  
「生活と科学演習」の軌跡-

小河 一敏  
(宮崎県立看護大学)

ナイチンゲール研究学会  
第11号 別刷  
2008年3月

## 【第4部】 ナイチンゲール看護論の応用

看護のための生活科学教育への取り組み  
—宮崎県立看護大学 普遍科目 文化と看護  
「生活と科学演習」の軌跡—

小河一敏（宮崎県立看護大学）

## 要旨

現代の学生を自律した生活者である看護職者として育てるための教育に、E.ナイチンゲールの説く「ホーム」の理想を実現する指針として、「生活科学」のデッサンを試みる。

展開としては、筆者の「生活科学教育」の現状と、そこに至る軌跡の報告を通して、筆者の認識と教育実践の発展を示し、あるべき「看護のための生活科学教育」の姿を問う。

### 1. 何故、今、「生活科学」が必要なのか

「生活科学」あるいは「生活と科学」との文言から、読者は何を想起されるだろうか。新聞の生活欄、テレビ番組の生活に関わる自然科学的研究の成果等が浮かぶ方も多であろう。しかし、巷間を賑わすこれらの情報にそれなりの価値は認めつつも、何か物足りない、「科学」というほどの内容があるのだろうか…との寂しさを抱く方もおられよう。

恐らく、この寂しさは以下のような本格的な科学の姿を描いてきた方には普遍的なものである。曰く「科学とは事物や現象のなかにひそむ法則性を発見して一般化し、体系化した認識である」<sup>1)</sup>と。本稿で問おうとしているのは、この意味での「生活科学」である。

もう少し述べるならば、「人間の生活のあり方は、時代の変化に応じて変化していくものである。したがって、健康を守る領域の職業人としては、人間の生活の変化に対応して新しい技術を生み出していくことができる学問

基盤を持つことが必須となってくる。これは人間に直接働きかける実践領域全般に共通して要求される基盤であり、その学問こそが『人間科学』、くわしく言えば『人間の生活科学』として統合されようとしている学問である」<sup>2)</sup>と説かれる「人間の生活科学」のデッサンを試みようということである。

申し遅れたが、筆者は看護の専門家ではない。専門は自然科学である。その一介の自然科学者が、何故「看護のための生活科学教育」に取り組むことになったのか。しかも、自然科学の生活への適用の範囲を越えて、先の本格的な「生活科学」を志すことになったのか。

端的には、「職責」故である。「ナイチンゲールの夢を宮崎に」として開学した大学で教鞭を取る限りは、専門領域が異なろうとも、学生が看護者として育つ過程に資することが求められてきた。無論、最初からそれが実現できたわけではない。しかし、10年という時を経て、「生活科学」の、「生活科学教育」の全体像を、デッサンレベルではあっても提示することが、今、必要であろうと思われる。

何故なら、教育対象となる学生の生活能力の低下現象は、決して本学学生のみの問題ではなからうと思われるからである。

本来、大学生活とは第1の人生から第2の人生への過渡期であり、親から自立して主体的に生活を創造していく過程にあり、ここで健康な生活を創る力を身につけられるかが、第2の人生の質を決める岐路となる。

更に、看護学生であるから、自己の生活の事実を素材として「健康な生活とは」という像を形成しておけば、それが看護の対象となる患者の生活を看る物差しとなるはずである。

自律した生活ができなければ看護は勤まらない。これは学びの基盤のはずである。しかし、現代の学生の自然成長性に、その実現を望むのは誠に厳しく、この傾向は年々増してきていると思われる。だからこそ、そこを目的意識的に導く教育が、今、必要なのである。

教育課程の概念図

F. ナイチンゲールは、この問題に関して何らかの示唆を与えていないだろうか。

ナイチンゲールは、「看護婦の訓練」において「訓練のための学校…のために本質的な事柄」<sup>3)</sup> 二つの内の一つとして「看護婦は人間的かつ規律的生活をするに適した『ホーム』で暮らすべきである」<sup>3)</sup> と説いている。

その実態は「睡眠や授業や食事」も配慮されて行われる。勤務と教育と学習も按配される。環境は道徳的で宗教的かつ勤勉で節度あるうえに朗らかな調子や雰囲気に満ちている。だから、どの階級の若い善良な女性が入ってきても心身の健康を損なうような心配の全くない、ひとつの『ホーム』として訓練の学校と病院とが運営されている。…よい病院にしようとなれば、病院看護婦は、家庭にいる女性や家事に携わる女性よりもずっと多くこのような援助を必要とする…」<sup>4)</sup> と説いている。

恐らく、「見習生ひとりひとりに気を配り、心をつく(す) 母親的存在」<sup>5)</sup> であった『『ホーム』シスター」<sup>5)</sup> の下での「家庭」<sup>5)</sup> 的生活を通して、見習生は「身体健康や技術的かつ理論的学習」<sup>5)</sup> や「道徳的かつ精神的生活」<sup>5)</sup> を修得していったことであろう。

これは受け継ぐべき遺産のはずである。「ホーム」という施設の実現は難しくとも、論理的に「人間的かつ規律的生活」を通して学ぶことは基盤のはずである。では、現代の看護教育に携わる我々は、ここをどう導くべきか。この問いへの一つの解答が本稿である。

2. 「生活と科学演習」の位置づけ・目的性

宮崎県立看護大学のカリキュラムは、図1に示す体系性を持ち、その土台に普遍科目群が位置している。この普遍科目群は看護に結びつく4つの柱を軸にして分かれている。

「文化と看護」の科目群の柱は「セルフケア能力を高める」とあり、人間社会の歴史や文化、セルフケアや癒しの方法である音楽や

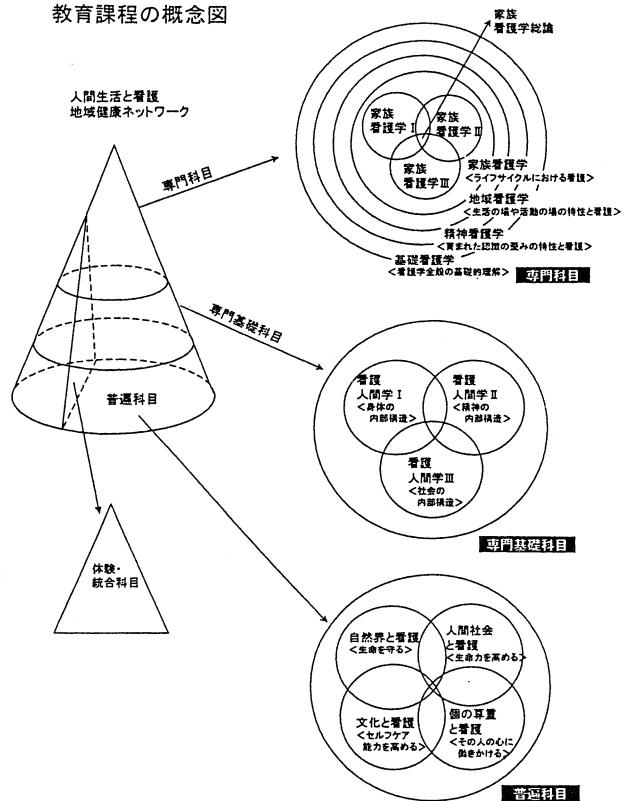


図1 宮崎県立看護大学カリキュラム

芸術などについて学ぶことを目標とし、「学問論」、「音楽論」、「近代の短歌」などの科目が並んでいる。この「文化と看護」の中に「生活と科学演習」も位置づけられている。

この位置づけから、「生活と科学」の目的を考えると、「日常生活を科学的にとらえ返して、合理的・効率的に生活する能力を身につける」(表1)となろう。しかも、「演習」なのだから、学生自身の実践を通しての学ばせることまでは、どなたも疑問をもたれまい。

何故なら、「文化と看護」は、人類の文化遺産(ここでは科学)を継承し、生活に活かして、自己の生活を健康的に創造すること＝「セルフケア能力を高める」が目的なのだから。

問題は、この後なのである。ここに冒頭の問題が生じてくる。つまり「ここでいう科学とは何なのか」である。この「科学」を既存の自然科学的研究の成果とするのか、それとも、新たな一分野として「生活科学」を志すのかが、大きな岐路となったのである。

筆者は、現在、この文化遺産＝科学を「人間の生活科学」と位置づけていることは既に述べた。つまり、「人間の生活の事実を対象として、そのなかに潜む法則性を発見して一般化し、体系化した認識」であるとしている。

そして、「演習」とは、学生自身の生活の事実を対象として、「その中に潜む法則性を発見して一般化し、体系化する」過程を、学生自

身に自力で辿らせることであり、そうして築いた「科学的な生活像」から、学生自身の生活を反省させ、よりよい生活の目標像を描かせて、生活を改善する実践としている。

「そんな夢のような演習が可能なのか」と問いたい方もあろう。お答えしよう。1年次の学生としてのデッサンレベルではあるが、それは実現しつつあると。

表1 2007年度 「生活と科学演習A」のシラバス（一部略）

授業科目	生活と科学演習A [Life & Science A]		責任 教員	小河一敏	単位数	1	必修 選択別	選択	科目等 履修生	可
					時間数	30	受講 セメスター	2		
学習 目的 と 目標	目的	日常生活を科学的にとらえ返して、合理的・効率的に生活する能力を身につける。								
	目標	① 自己の生活を整える演習を通して、看護の対象である他者の生活をとりえるための「物差し」となる「良い生活」の像をつくる。 ② 生活現象を過程としてとらえられる。 ③ 自己の生活過程（1日＝24時間・1週間・1ヶ月・3ヶ月・1年）を評価できる。 ④ 健康的な生活の像に従って、自己の効率的な生活を工夫し、他者に理解できるよう説明できる。								
回数	学習課題	学習内容並びに方法							担当教員	
1～3	生活を科学するとは？	ゼミナール形式。数人毎の班に分かれ、弁証法を学びつつ、テーマに沿って、日常生活の事実を基に、班内で討論を行い、問題を考察していく。 演習の目的と内容について、必要となる基礎概念（生活・科学・事実・論理など）を踏まえて理解する。							小 河	
4～11	生活を科学する i 朝の過ごし方 ii 昼の過ごし方 iii 夕方の過ごし方 iv 夜の過ごし方	1日24時間の生活過程のなかで、各時間帯の特性をとらえ、各時間帯の健康的な過ごし方について、具体的な生活現象（洗顔・歯磨き・換気・採光・入浴など）を取り上げながら考察し、自己の生活を評価し、整える実践を行う。								
12～13	合理的な生活像の創造	学んだ内容を班毎にまとめ発表し、質疑応答を通して、理解を深める。								
14～15	自己の生活の客観化	演習を通じた自己の生活の変化について客観視し、今後の課題を設定する。								
評価	演習への取り組み（出席・課題の実践・発表等を含む）およびレポート									
教科書 参考書	(必読参考書)	『看護学原論講義』薄井坦子著、現代社 『なんごうつぐまささんが説く看護学科・心理学科学生への“夢”講義(1)・(2)』南郷継正著、現代社								
	(参考書)	『看護のための「いのちの歴史」の物語』 本田克也・加藤幸信・浅野昌充・神庭純子著、現代社 『三浦つとむ選集5 ものの見方考え方』三浦つとむ著、勁草書房 『看護覚え書』ナイチンゲール著（訳本）、現代社								
備考	本演習は、「自然界と看護」の必修科目「生体と環境」の内容を日常生活に適用する実践編となる。弁証法の学びも、ありふれた日常の生活現象を用いた基礎から行う初心者用の入門編である。									

2006年度の総括発表討論会の発表テーマを紹介すれば、「季節の変化とライフサイクル・演習を受ける前と受けた後との1日のライフサイクルの変化・個々人の生活を工夫する…等々」が並ぶ。そして、学生は主体的に、看護学上のモデルを駆使して自己の生活過程を客観視し、1年次に本学で受けた教育内容全体を取り込みながら、よりよい生活像を描き、生活改善に歩み始めたのである。

では、そのような変化をもたらした教育の実際はどのようなものか、そも「科学的な生活像」とはどのようなものか、が問われよう。

### 3. 授業の実際、および「科学的な生活像」

「生活と科学演習」は、1年次後期 Semester（10月～3月）に設定されており、学生は半年を経て、大学生生活に慣れ、夏休みを越

えて再スタートを切って臨んでくる。通常6-7人の班でグループワークを中心に進める。

授業の概要は以下である。まず、理論的な基礎として、日常生活について討論する形式で弁証法と認識論の学びを行い続ける。これと並行して、事実的な基礎として、個々人の生活過程を追いかけていく。これは一日の生活の事実を起床から就寝まで時系列で記録する方法で行う。この個々人の生活の事実をグループ内で共有し、ここから図2に示す「人間の生活一般の体系像」を描かせると、学生達は、「人間の生活一般の体系像」を柱・物差しとして自分たちの生活をとらえ返し始める。

この「人間の生活一般の体系像」が、「科学的な生活像」の表象レベルの形である。その構造については、本稿の5.で説明する。

ここ2・3年に定まってきた授業の具体的な展開を2007年度で示す（表2）。

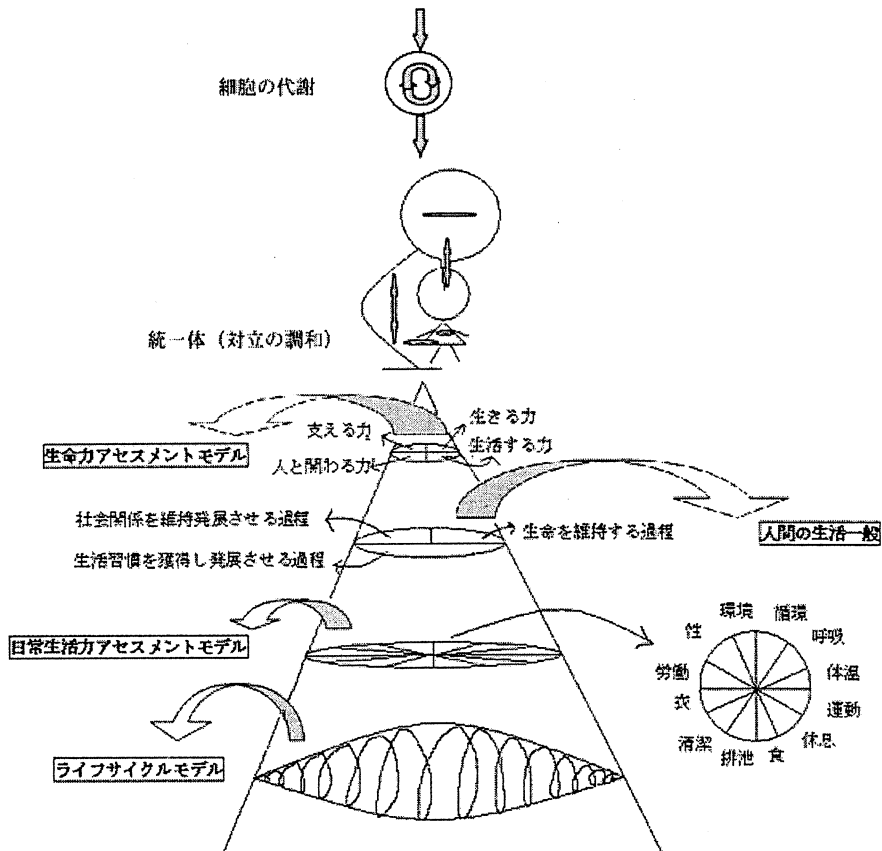


図2 人間の生活一般の体系像（2005年度卒業研究論文<sup>6,7)</sup>より引用・一部追加）

表 2 2007 年度 「生活と科学演習 A」 の展開

回	群	テーマ	弁証法と認識論	生活に関わる演習	トピック
1	I	看護に必要な 頭の働きとは？	弁証法の学び 生活を 科学的に把える視点	生活を見つめる —事実の把握：日程表の勧め—	新人看護師 の失敗事例
2	II	1日のライフサイクル をとらえる	悪に強きは善にも… 本当の正直とバカ正直	1日の生活の中の部分行動に 着目	歯磨きの意 味・功罪
3		1日のライフサイクル をとらえるII	失敗を科学する	1日の生活の事実を挙げる	ペニシリン 清拭の事例
4		1日のライフサイクル をとらえるIII	損と得とのつながり	朝・昼・夕・夜：どんな時間か？ どう過ごすのが健康的か？	睡眠と体の つくりかえ
5		1日のライフサイクル から 1 週間のライフ サイクルへ	全体と部分との つながり	日程表は生活を把えるために 1日の生活のリズムを整える計 画を立てる	朝の空気が 清々しいの は何故？
6		1日のライフサイクル から 1 週間のライフ サイクルへII	妥協の問題： まわりみちの重要性 <b>否定の否定</b>	今、1日の生活を整える意味 平日と休日はどういう違いがあ るか？どう過ごす？	3・4年の秋 臨地実習・ 卒業研究
7		1週間のライフサイク ルから1ヶ月のライ フサイクルへ	全体を見ながら決定的 な部分に力を注げ	健康的な1週間の生活像 1ヶ月の生活の変化—何がどう 変わってきたか？—	先輩の悩み アルバイト と臨地実習
8		1ヶ月～3ヶ月の ライフサイクル	<b>量質転化</b> 量質転化の 二面性とその仕組み	10月・11月の生活の変化 何を物差しにして見ている？	看護方法 夢講義事例
9		I	生活とは？ —日常生活をとらえ る物差しをつくる—	牛若丸と飯つぶ 「量質転化」と「全体と 部分」とのつながり	ライフサイクル・日常生活力ア セスメント・(生命力アセスマン ト)・人間の全体像・代謝
10	生活とは？II —日常生活をとらえ る物差しを深める—		<b>対立物の相互浸透</b> 対立物の相互浸透の 二面性とその仕組み	10月・11月・12月の3ヶ月を どう過ごしていくか？ 「人間の生活一般の体系像」の 仕組み	先生と生 徒・看護師 と患者との 相互浸透
11	II	3ヶ月のライフサイク ルから 1 年のライフ サイクルへ—四季の 変化と生活—	総括 —弁証法とはど のようなものか？どの ように役立つのか？—	「人間の生活一般の体系像」か ら3ヶ月の生活の変化・四季の 変化をとらえる	弁証法(性) は生活の中 に潜んでい る？
休	III	冬の課題：レポート書初め！ テーマ：「2007年をどう過ごしたか」・「2008年の目標」			
12		大学生生活とは？ —四年度の計は —一年次にあり！—	書初めの意義 人間は描いた目的によ って生活し、創られる	大学生生活とはどういう時期 か？・4年間の大学生生活—各学 年はどういう学年か？—	4年間の 履修計画表 シラバス
13	IV	総括討論 I	総括発表討論会の意義	日程・場所・公開範囲・評価方 法・テーマ・学習計画	生活と科学 Aの展開
14		総括討論 II	自主ゼミ		ポスター
15		総括発表討論会 健康な生活像の創造	討論・評価・自己評価	発表	各班で作成 した資料

授業はⅠ～Ⅳの4つの群におよそ分けている。Ⅰは理論的柱の構築、Ⅱは事実の把握、Ⅲはライフサイクル全体像からの現在の位置付け、Ⅳは総括と今後の展望となる。

第1回では、「新人看護師が両手にやけどをおった患者に対し、マニュアル通りに包帯を巻いたら、後に『食事ができない』とのナースコールを受けた」という事例<sup>8)</sup>を用いる。

事例に対して、学生達は「自分も将来起こしてしまうかも…」と共感しながら、「何が問題か」を考えていき、やがて「当時、この新人看護師には、目の前の痛々しい患者の像、何とかしたいという像のみがあって、その後の生活の像の過程的な展開がなかった」ということに気づきます。ここから生活を運動性においてとらえることが看護において必要となることを納得させ、その為の弁証法と説く。

第2回～第8回は、生活事実の記録の繰り返しにより、1日の生活・1週間の生活・1ヶ月の生活・3ヶ月の生活…とライフサイクルを、リズムを掴みながら描いていく。

並行して、「頭の柔軟体操」と題し、三浦つとむ著「こう考えるのが正しい」<sup>9)</sup>を用いて生活の中の弁証法(性)を、日常生活の具体例と重ねて学んでいく(10回ぐらいまで)。

その上で、第9回・第10回で、「生活とは何か?」という問いを与えていくと、学生はライフサイクルモデル、食・運動・睡眠、あるいは人間の全体像モデル、細胞の代謝モデル等々を想起してくる。

そこで、これらのモデルを抽象度の高い方から低い方へ並べさせてみると、図2に示す「人間の生活一般の体系像」がおぼろげながら浮かんでくる。すると、学生は自分たちが、余り注意していなかった側面に気づきます。具体的には、日常生活力アセスメントモデルの食・運動・睡眠以外の項目である。

第11回では、描いてきた「人間の生活一般の体系像」から3ヶ月の生活記録を見ていく。すると、夏から秋、更に冬という外界の

変化に伴って、日常生活力アセスメントの12項目が、互いに連関しあいながら変化していく様子を、例えば起床時間の変化やシャワーから風呂への変化を重ねてとらえることが可能となる。ここから更に1年間のライフサイクル、四季の変化と生活の変化を描いていく。

このころになると、一つ一つの具体例を通して学んできた弁証法が、生活現象に重なり出す。例えば、「全体と部分」という過程的・体系的視点の基礎を、1日・1週間・1ヶ月・3ヶ月・1年というライフサイクルに重ねること、「人間の生活一般の体系像」とその部分としての生活項目に重ねることが可能となり始める。また3ヶ月というスパンでの変化を、外界と自分自身の生活との両側面から、各々の量質転化の側面や互いの相互浸透の側面としてとらえ返すことが可能となり始める。

こうして、理論的柱と事実を重ねて見る力ができてきたところで冬休みに入る。冬休みには、その年一年を振り返ることと、新年の目標を立てるという課題を出す。

この課題について、第12回では、人間が目的意識的存在であること、つまり、目的を立ててしか行動できず、その目的意識的行動によって自分自身が、そのように創られていってしまう存在であることを説き、だからこそ、節目となる時に過去を反省し、未来への目的を目的意識的に立てること、その目的を意識し続けて生活することが、よりよい人生を歩むには必要となることを説いている。

更に、ライフサイクル全体を俯瞰して、本稿の1に認めた大学生生活の意味を自覚させる。その上で、シラバスを用いて4年間の学びの全体像を追いかけて、各学年でどういう実力をつけておくことが必要かを自覚させる。例えば、3年次の後半から臨地実習が本格的に始まり、この時期までに、知識だけでなく、実習に耐えられる体力を作らねばならず、それが可能となるには、どのように自己の生活を整えていけばよいか…と考えさせていく。



第13回から総括に入るが、その冒頭に表2の「生活と科学演習A」の展開を示し、12回の演習で何を目的として何をどのように学んできたかを検討させた後、今後の自己の生活をどう創っていくのかを考えるよう促す。

第14回は学生自身で討論させ、第15回で「健康な生活の創造」をテーマとして各班の発表、質疑応答で全体総括を行う。

#### 4. 「生活と科学演習」の軌跡

3.の展開により、学生の変化に一応の手応えを得ている現在である。しかし、97年度の開学時から、このような展開が可能な訳もなく、これ自体、筆者が主体的に取り組み始めてから数年の模索の結果だったのである。

開学当初、「生活と科学演習」は形の定まらない科目だった。本稿1.で述べたように、新聞やテレビでも、いわゆる「生活科学」として様々な事柄について、自然科学的研究の成果から様々な工夫が紹介されている。

「人類の文化遺産を継承し、自己の生活に活かして、自己の生活を健康的に創造する」という目的にしても、この文化遺産を自然科学の研究成果として見るなら、それも間違いとはいえない。実際、開学時からの数年間は、「生活と科学」の科学とは、およそ「物理・化学」の基礎を説いていたのである。

ただ、開学初年度は、「生活」という側面をしっかりと見ようと、「胎児と母体の生活」・「赤ちゃんの生活」・「幼児の生活」・「子供の生活」等といった形でライフサイクル全体を概観していき、その時期の日常生活の12項目の中身を、生命科学の側面から論理的にとらえ返そうとしていた。そして、そのなかの一部としてトピック的にネプライザーの構造や水銀血圧計の構造等々を説いていた。

初年度のこの取り組みは、現在、振り返ってみると、原点として大きな基礎となっているように思える。ただ、余りにも広い範囲を

対象としており、漠然とした展開となってしまうことは確かだった。

そのため、2年目以降、「看護の実体に関わる技術」及び「身体の内部構造」の理解の為の物理・化学的基礎に焦点を当てていった。

現実の教育課程において、これらの基礎が学生に足りないのは明らかだった。筆者自身、看護教員との共同研究により、学生がこの弱点を補えるようテキスト<sup>10)</sup>を執筆していた。

ただ、年度が進むに連れ、「生活と科学演習」は、高校までの物理・化学の単なる補習になっていくように、そして、肝心の「生活」が消え去っていくように筆者には思われた。

2001年度には、「基礎自然科学」という学生の物理・化学の不足を補う科目を開講したこともあり、「生活と科学」を「生活」に焦点を当てたものに戻そうと筆者は動き始めた。

そして、2003年度より「生活と科学演習」はA・B二つに分離し、筆者がAを担当することになった(表の「A」の文字はこの為)。

こうして物理・化学に囚われず、「生活を科学的に見ていこう」と再出発したのだが、当時は、教えるべき具体的内容は殆ど持っていなかった。ただ、「弁証法を柱にすれば何とかなるのでは…」という思いと、「科学とは事実から論理を抽出して体系化した認識なのだから、生活の事実をまるごと取り上げて科学化することも可能だろう」と出発したのだった。

こうして、弁証法の基本の学びとともに、日常生活の事実を記録することを学生とともに進めて行き、その中で歯磨きとか採光や遮光といったこと等の意味を、学生同士、討論を通して考えさせていった。この積み重ねの中で、やがて学生達に、物事を多方面から見て、「全ては条件付で変化する」と弁証法的に見つめる目が育っていった。

こうして、生活の部分部分をとらえる力は育っていったのだが、取り上げた事柄は皆部分でしかないことに気づいた。しかし、「看護とは、新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、

静かさ…食事内容…こういったことのすべてを、…整えること(傍点は筆者)<sup>11)</sup>であった。

そこで「生活全体を掌に載せることはできないか」との思いから、学生に「生活とは何だろうか?」と問いかけた。すると学生は、ライフサイクルモデル、食・運動・睡眠、あるいは人間の全体像モデル、細胞の代謝モデルを想起してきた。これらを体系化して「人間の生活一般の体系像」を作ってみた。

この体系像を踏まえて、生活の事実をとらえ返していくと、これまで抜け落ちていたところがとらえられていき、学生の頭の中で日常生活力アセスメントの12項目が、自分達の生活の事実と重ねて描け始めたようだった。

ここまでいくと、『看護学原論』が分かってきた」という声が学生から上がってきた。学生達によると、事例を検討する際、「人間の生活一般の体系像」を意識すると、自分達が事例の中の何を今問題にしているのか、教師が説いているのは何処なのかを、その体系像に位置づけてとらえられたということらしい。

こうして、「人間の生活一般の体系像」を、生活をとらえる柱として位置づけ、事実からそこに至る過程とそこから事実をとらえていく過程として、現在の展開を構築してきた。これは他面では、以上の数年間の模索の歴史を毎年辿り返しているということでもある。

## 5. 看護のための生活科学教育として

「果たして、これが『人間に直接働きかける実践領域全般に共通して要求される基盤』<sup>2)</sup>たる『人間の生活科学』<sup>2)</sup>の姿だろうか」との厳しい問いもあろう。だが、「この問いへの直接的解答は、未来に托さざるを得ない」というのが現在の筆者の偽らざる心境である。

筆者は「看護のための生活科学」との一点を守り通してきた。その意味で「人間の生活一般の体系像」は特殊性を持つと留意しつつも、ここから見るとき、巷間の「生活科学」

とされる諸科学の研究成果は、その殆どがこの体系像の部分に位置づけられると思える。

つまり、生活の部分部分についての詳しい研究は、それら諸科学の専門家に任せておいてよいが、その部分部分が生活全体のどういう位置にあり、どういう意味を持つのかは生活全体をトータルに見つめる全体像がなければ分からない。その土台に当たる生活の全体像こそが、「人間の生活一般の体系像」と筆者は位置づけている。何故そういえるのか。詳細は別稿に譲るが、簡単には以下である。

「人間の生活一般の体系像」の利点は、その体系性にある。つまり、人間の生活のあらゆる側面を、あらゆるレベルから、全て体系的に連関づけて把握できることにある。

体系を下から見れば、全ての人間は、誕生から死までの過程を歩んでいる。そして、ライフサイクル全体を通して、日常生活の12項目が互いに連関しあいながら発展し、衰退していく。この12項目を大きくとらえ返すと、生命を維持する過程・生活習慣を獲得し発展させる過程・社会関係を維持発展させる過程の3つの側面が浮かび上がる。これは人間の生命力の4つの側面、即ち、生きる力・生活する力・人と関わる力・支える力の発露である。人間とは、単なる生命体ではない。

「認識をもつ有機体が社会関係のなかで互いにつくりつくられる諸過程の統一体である」<sup>12)</sup> 従って、その生命力は、上記の4つの側面にとらえる必要がある。しかし、生命体としての一般性たる代謝は貫き通されている。

体系を上から見れば、頂点の「細胞の代謝」が中心軸である「統一体」(対立の調和)即ち「人間」を貫き通している。その「人間」のライフサイクル上の「生命力」のあり方に「人間の生活一般」の3過程が規定され、「日常生活力」の12項目が規定されて現れてくる。

日常生活の一齣一齣を、以上の各層の体系性で見取ることが可能となる。ここから見る限り、抜け落ちるものは何もないのである。

巷間の「生活科学」とされる諸科学の研究  
成果は、その殆どが日常生活の 12 項目の食  
とか運動とかの要素に着目したものであり、  
この体系像の部分への取り組みである。

それらの諸成果を体系像から位置づけると  
は、その部分への取り組みを全体の連関から  
とらえ返すという意味である。つまり、部分  
に着目した成果が、生活全体の向上に本当に  
役立つかどうかの吟味が可能となるのである。

初期の学生達の討論の一例をあげれば、遮  
光カーテンは睡眠つまり休息という側面では  
役立つかもしれないが、起床から登校つまり  
運動・労働という側面では邪魔になりかねない。  
このように、1 日のライフサイクルという  
範囲でも全体像を描いて、他との連関の基  
で位置づけて考えることを導けるのである。

「それは分かった。しかし、これは本当に  
看護学生の育ちに役立っているのか、看護実  
践に役立つのか」との問いもあろう。

残念ながら、この問いに直接、十全に応え  
られる事実を現在筆者は提示し得ない。

現在の筆者は、1 年次学生に対する上記の  
教育と並行して、4 年次学生の卒業研究指導  
において、「人間の生活一般の体系像」を患者  
の対象特性把握の柱として、実用性を検証し  
続けているところであるから<sup>6,7)</sup>。

「それにしても、授業を受けた学生の具体  
性を知りたい」との声もあろう。そこで、歴  
代の学生の学びの軌跡を表 3 に示す。図 2 お  
よび前の解説に重ねて読んで戴ければと思う。

いずれにせよ、「看護実践に役立つのか否  
か」という問いへの最終的な判断は、本学の  
卒業生が現場に出た後に振り返ってみたとき、  
答えてくれるのを待つしかないと思われる。

以上、一介の自然科学者としては、冒険と  
もいえる内容を提示した。看護教育の専門家  
に果たして受け入れて戴ける内容か否か。そ  
して、「ホーム」<sup>3,5)</sup>の理想の継承に足る内容  
か否か。それは不明であるが、真摯なる努力  
の結果であることだけは、ご理解願いたい。

そして、もし看護教育の基礎として、広く  
は大学教育の基礎として、筆者の問題提起に  
賛同戴ける方がおられれば、今後、共に切磋  
琢磨できたらと願う。本稿がその為の一つの  
礎石となれば、これに勝る喜びはない。

#### 謝辞

第 28 回研究懇談会発表を論文化したのが  
本稿です。ご指導戴いた皆様に感謝致します。  
引用許諾戴いた卒業生・学生に感謝致します。

#### 文献

- 1) 薄井坦子著:[改訂版]看護学原論講義, p.9,  
現代社, 1996
- 2) 前掲 1), p.12
- 3) 看護婦の訓練, 第二巻, p.78
- 4) 前掲 3), p.80
- 5) 前掲 3), p.90
- 6) 仮屋香著:看護のための対象特性はどの  
ようにすれば捉えられるか~看護学上の  
モデルを駆使し、事例検討を行い、人間  
の生活一般を体系化する~, 2005 年度  
宮崎県立看護大学卒業研究論文, 2006
- 7) 中原利恵著:社会関係を維持発展させる  
過程の看護の重要性~成人期・ターミナ  
ルの事例について人間の生活一般の体系  
像から検討する~, 2005 年度 宮崎県立  
看護大学卒業研究論文, 2006
- 8) 本田克也・加藤幸信・浅野昌充・神庭純子  
著:看護のための「いのちの歴史」の物語,  
p.19, 現代社, 2007
- 9) 三浦つとむ著:もの見方考え方 三浦つ  
とむ選集 5 所収, 勁草書房, 1984
- 10) 小河一敏・邊木園幸・加瀬田暢子著:  
看護学生に贈る”自然科学の基礎知識”  
第 2+1 集 2001 年度, 宮崎県看護学術振  
興財団助成研究報告書, 2002
- 11) 看護覚え書, 第一巻, p.150-151
- 12) 薄井坦子著:科学的看護論 第 3  
版, p.107, 日本看護協会出版会, 1997

表3 「生活と科学演習A」学生の学びの軌跡

<p>生活と科学演習Aで私は何を学んだか 2003年度</p>	<p>1.生活と科学演習Aはどのように展開したか                  看護の対象である他者の生活を捉えるための「物差し」となる「良い生活」の像をつくるために、まずは自分の生活を整えることを前提とし、朝・昼・夜の生活のあり方を人間の内部構造、また外界の環境など様々な方向から考えた。また弁証法的な考えを学び、身につける事で、対象物の変化、発展を部分的ではなく、全体を見ていく必要性を学んだ。そこで私達は「狼に育てられた子」から人間の一般性は私たち生物体に貫かれているものであってそれが基本となっていることを確認し、一日(朝・昼・夜)の生活の事実からそれぞれの時間帯の目標(朝は休息から活動へ、昼は活動を充実させるために、夜は明日への活力をつけるために)に沿った生活のあり方を人間の生活一般と照らし合わせ、グループ分けをし、それがどのようにつながっていくのかを皆で話し合いながら考えた。その時、様々な事実の中で共通性と特殊性を見抜く事が大事だと学ぶ。例えば、お風呂と睡眠についてだが共通性としては休息に関係していることだ。特殊性としてはお風呂では清潔など。これらの特殊性を見抜いていかないと(意識していかないと)、本当の「良い生活」を導けないのだと学び、それぞれの目標に見合った「生活」を皆で考えた。そして自己実践し皆で納得しながら、「良い生活」を取得していった。</p> <p>2.生活と科学演習Aで私は何を学んだか                  生きていく上で、摂取→自己化→排泄は欠かすことのできないものである。この代謝をスムーズに行うために朝・昼・夜の生活のあり方を見直し、改善することがどれだけ大切か、看護者になる私たちにとって自分の健康を守ることが他人の健康を守ることにつながる、と言うことを私は一番理解できたと思う。</p> <p>何気なく行っている現象(お風呂・食事・睡眠など)でも人間の一般性に照らし合わせて考えると、それぞれ人間にとって重要な意味を持つことを理解したし、一つの現象でも様々な意味を持つことが理解できた(トイレの場合、排泄はもちろん、筋肉の運動、循環、体内を清潔にするなど)。しかも朝・昼・夜の生活の中で同じことをしていても意味が異なることを学んだ(朝シャワーの大部分は目覚めるためのもので、夜のお風呂は休息・清潔が主である…など)。</p> <p>このとき私は人間の内部構造を把握することを大事にした。そうすることで、人間にとって必要なことが見えてくると思ったし、実際見えてきたと思う。例えば夜の生活。食事・お風呂・睡眠の関係を日ごろ疑問に思っていたことを中心に人間の内部構造から考えることで理想的な流れが見えてきた。消化のあり方、お風呂時は表面に血液が集まり一時期、消化が妨げられるなど、より良い生活をしていくためには知っておかなければならないことを私は様々な要素から身につけることが出来たと思うし、朝・昼・夜のそれぞれの時間帯にあった目標にそって物事を考えるようになったと思う。…後略(注:2003年度当時は夕方と夜を区別していなかった。小河)</p>
<p>第12回レポート 2004年度</p>	<p>内容:今回は昼の生活の事実をあげ、その意味を考えた。事実として昼食、昼寝、トイレ、歯磨き、会話などがあげられる。その意味の一つ一つはエネルギー補給、脳細胞の回復、排泄、清潔、循環、情報交換と様々であるが、これらを大きな枠組みでみるとアセスメントモデル、そして生命を維持する過程、生活習慣を獲得し発展させる過程、社会関係を維持発展させる過程に繋がる。それらを踏まえて生活環境を整えていくが、その理由として体に影響を及ぼすものを見つけ整えること、生活の中のデメリットをフォローしていくことである。</p> <p>感想:今回の授業で昼の生活の事実をあげ意味を考えていった。行動の一つ一つにはたくさんの意味がある。昼食一つを取っても活動期のエネルギー補給、気分転換、食に対する満足感を満たすなどがある。このように昼の生活の一つ一つ見ていくと大きな枠組み(実体面・認識面・社会関係面。また生命を維持する過程・生活習慣を獲得し発展させる過程・社会関係を維持発展させる過程)が見えてくる。牛若丸の飯粒の話でもあるように、一つ一つ詳しく見て意味を考え納得した上で、全体や他の所に触れていくことが生活を考える上で大切だと思う。</p>
<p>冬の課題 2005年度</p>	<p>私の2006年の目標は、自分の健康にとどまらず周りの人(特に家族)の生活も整えることができるようになることである。私自身看護大に入学するまでは自分の健康について考えることはなかった。しかし自分の生活を整える力がだんだんと身についてくるうちに、自分にとどまらず自分の家族の生活が気になるようになった。特に単身赴任している父の生活の様子は、改善すべき点が沢山見えていた。この目標を達成するための勉強にもなり、今年の冬休み私は父のアパートに行き、一週間ほど父の身の周りの世話をした。料理、洗濯、掃除などの家事、また父の話を聞いたりして、父の生活習慣を意識的に観察するようにした。その時、仕事での疲れを家で取り次の日の仕事にはリフレッシュして行くことができるような環境をつくることや、健康状態向上のため食事に一人暮らしで欠けがちな野菜をできるだけ使ったりすることを心がけた。一週間で、改めて人の生活を整えることの難しさを感じた。しかし、父は体調を崩すことなく仕事ができて喜んでくれたので、一応は成功したのかなと思う。しかし、新たな問題も見えた。喫煙についてや、一人のときの食事が肉や魚に偏りがちになることだ。次に行くときは、父の生活をきちんと分析して、どう整えていくかの計画を立てて行きたいと思う。そして、何もかも私がするのではなく、父が一人のときに健康に生活するためのアドバイスができればいいと思う。</p>